

『日本アジア研究』第11号（2014年3月）

## 清朝宮廷演劇における「薛丁山」物語の受容 ——「金貂記」物語の変容を通じて——

柴崎公美子\*

本稿は、清朝宮廷演劇を管理していた「昇平署」が保有していた劇本の中でも、明万曆期の伝奇で、薛仁貴・丁山親子の蛮族征伐を描いた『金貂記』に基づくであろうと考えられる六種の劇本について検証した結果を述べたものである。これらのテキストは、①太宗が親征せず、②敵国が「高麗」であり、③敵将が「鉄勒金牙」という3点を共通にしており、「高麗グループ」とよぶにふさわしい。清朝宮廷で演じられていた戯曲は、今上皇帝の偉業を称揚しそれを内外に示すため、従来知られていた物語に皇帝の業績を投影した改編が加えられることがあった。「高麗グループ」の戯曲は、太宗ホンタイジによる李氏朝鮮制圧（丙子之役）を受けた順治期以降の改編ではないかと推測される。その中には康熙帝の諱の「玄」の字が避けられておらず、順治期のテキストの可能性のあるものが二種類あった。

これに対し昇平署には他に、同じく薛父子の蛮族征伐を描くが、敵を「哈密国」、「蘇元帥」、「回兵」とする「哈密グループ」とよぶにふさわしい一群の劇本が存在している。そのうち、成立が最も古いと考えられる『定陽関』以外、全て「唐太宗の親征」という要素を持っており、乾隆帝のジュンガル・回部平定を受けた改編本であろうと考えられる。

薛丁山の物語としては、小説『説唐三伝』の敵国が「哈密国」であり、宮廷でも「哈密グループ」の『征西異伝』、『鎖陽関』の上演が光緒半ばまで上演されていたことを見るように、「哈密グループ」の内容が主流となった。朝鮮情勢が乾隆期には落ち着いたのに対し、回部情勢は道光期に至っても回民の騒乱が相次ぎ清朝の苦悩の種であり続けた。こうした政治的な事情が、回部を仮想敵とする「哈密グループ」の上演を要求し、主流化・定着化につながっていったものと推測される。

キーワード：『金貂記』、『説唐三伝』、薛丁山

### はじめに

薛仁貴を始祖とする薛家の複数世代に亘る武功を描いた「薛家将」の小説、『説唐後伝』、『説唐三伝』、『反唐演義』は、現存する刊本の刊行時期を見ると清乾隆期を中心に興隆したことが伺える。こうした「家将もの」小説は、民間伝承や戯曲において語られてきた様々な故事が蓄積し、体系化されて成立したと考えられている。筆者は、故事が体系化されていく経緯を検証する中で、清朝宮廷で上演されていた「薛家将」劇の劇本数種を調査し、その劇

\* しばさき・くみこ，埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程，中国文学

本の改編が小説にも反映されているのではないかという推論を得た<sup>1</sup>。即ち、調査した劇本の中では、

- (1) 唐の敵役とされる国が「哈密国」であり、敵兵が「回兵」などと称されている
- (2) 「唐太宗が都に残り薛仁貴が総大将として出征する」という内容から、「唐太宗自ら親征する」という内容に改編されている

という事象が認められた。「哈密(迷)国」即ち「哈密」は、清朝初期は特に、ジュンガル部と清朝との対立の火種になることが多かった実在の地域で、「回兵」と戦ってこれを平定し、「哈密国」を狙ったジュンガル部を討ち滅ぼした乾隆帝は、その業績を宮廷演劇に組み込み、国内外に広く知らしめようとした。その結果「回兵」「哈密国」を敵と設定し唐太宗が親征する「薛家将」の劇本が現れたのである<sup>2</sup>。こうした検討の結果を以て小説『説唐三伝』を見てみると、『説唐三伝』では敵国が「哈迷国」であり、太宗が自ら哈迷国を討伐すべく出征するという内容になっており、劇本と一致する。即ち、「哈迷国」、「太宗親征」という要素は、共に清朝宮廷演劇においてまず発生し、その結果小説に組み込まれたと考えられるのである。

さて、『説唐三伝』で語られる薛仁貴とその息子薛丁山の物語としては、明代の伝奇『金貂記』がそれに先行する数少ない事例として存在する<sup>3</sup>。『金貂記』は撰者不詳、明中葉期には成立していたと考えられている<sup>4</sup>。現存するのは万暦年間の富春堂刻本であり、「古本戯曲叢刊初集」にその影印本が収録されている。以降、混乱を避けるためにこれを富春堂本『金貂記』とする<sup>5</sup>。

「哈密国」、「唐太宗親征」という要素が清朝宮廷演劇の劇本上でまず発生したと言い得るのは、劇本とこの富春堂本『金貂記』とを比較した結果である。即ち富春堂本『金貂記』では、

---

<sup>1</sup> 2013年1月13日開催の「清朝宮廷演劇文化の研究」第15回研究会にて、「清代宮廷演劇における薛家将物語について」というタイトルで筆者が口頭発表した。この発表に基づき執筆した論文が、『中国古典小説研究』第18号に掲載される予定である。

<sup>2</sup> 同様の事例が『西遊記』を宮廷演劇として構成しなおした『昇平宝筏』でも行われていることが磯部彰「大阪府立中之島図書館蔵『昇平宝筏』第一本解題」(東北大学出版会, 2013年)において論じられている。

<sup>3</sup> 清末の人董康が編纂し、元末から乾隆年間までの戯曲の情節を収録した『曲海総目提要』には「清鐵笛道人撰」とされる『定天山』という戯曲があり、これも薛仁貴・丁山親子の戦記であるが、ストーリー全体が『説唐三伝』とは異なっており比較しにくかったため今回の検証からは除外した。郭英徳編著『明清伝奇総録』(河北教育出版社, 1997年)下巻では『定天山』は「周滄選」として清康熙二十年から五十七年間成立に分類されている。

<sup>4</sup> 『明清伝奇総録』上巻、118頁

<sup>5</sup> 前掲4、118頁及び李修生主編『古本戯曲劇目提要』(1997年, 文化芸術出版社)では、『金貂記』として富春堂本の他に清康熙間内府抄本2巻, 清烏絲閣抄本2巻, 旧抄朱絲閣本2巻があるとする。

- (1) 唐の敵役とされる国が「遼」である
- (2) 唐太宗が都に残り薛仁貴が総大将として出征する

という内容になっており、劇本とも小説とも異なるからである。

ところで、先に検証した劇本以外にも、清朝宮廷が管理していた劇本に薛仁貴・丁山親子を中心に物語るものがあり、題名にそのまま「金貂記」を冠するものもある。内容によって分類すると、「金貂記」のタイトルを持たない劇本の中にも「金貂記」劇本の一部であろうものが見受けられた。しかし、これら「金貂記」劇本は富春堂本『金貂記』とは異なり、敵国が「遼」ではなく「高麗」であり、敵将が「蘇保童」ではなく「鉄勒金牙」であるという特徴を有する。

こうした、清朝宮廷における「金貂記」劇本はいかなる性格を持つものであるのか、また、先に検証した「哈密国」、「唐太宗親征」という要素を持つ劇本とはどのような関係にあるのか。本稿では、それらの諸問題について検討し、清朝宮廷内で「薛丁山」物語がいかに受容されてきたのかを考えてみたい。

## 一. 富春堂本『金貂記』について

富春堂本『金貂記』は、『新刻出像音註薛平遼金貂記』と題され、全四巻四十二折から成る。冒頭に元の楊梓の撰とされる雑劇『功臣宴敬徳不服老』を附す。また、この全四十二折の中で第三折の途中から第九折までが欠けている。まずは欠けている部分をそのままに、富春堂本『金貂記』のあらすじを確認する。

唐太宗の頃、高麗征伐で成功を収めた薛仁貴は、平遼公の位を授けられ、妻柳氏、子の丁山と共に繁栄を謳歌していた。しかし、薛仁貴に恨みの感情を抱く皇叔李道宗による讒言の為に投獄されてしまう。これを知った尉遲敬徳は義憤にかられ、道宗を殴りつけて前歯を二本折る。これに怒った太宗は敬徳から官位を剥奪し、都から追放する。薛仁貴並びに尉遲敬徳といった軍事の要がいなくなった唐の隙を狙い、遼の蘇保童が侵攻してくる。徐勣は仁貴を征西大元帥に封じて出征させ、戦功を挙げることで罪を償わせるよう太宗に上奏する。その頃、李道宗は刺客を送り仁貴の妻子を殺させようとするが、柳氏と丁山はその魔手から逃れる。逃亡の途中で強盗に遭った親子は、路銀に困り、仁貴がかつて下賜された金貂を売ろうとして隠居していた尉遲敬徳と再会し、彼の家に身を寄せることになった。一方、仁貴は保童に敗退し、鎮陽城に追い込まれ、籠城戦を余儀なくされていた。程咬金が囲みを突破し都に救援を求めに帰るが、道宗は陰謀を巡らし、懦弱な兵や老兵で編成した救援軍を送り尉遲敬徳に率いさせようと太宗に進言する。程咬金がその詔勅を持って敬徳の下を訪れると、敬徳は狂ったふりをするが咬金に見破られ、やむなく丁山と共に出征する。道宗によって死に追い込まれ、女仙となっていた翠屏は、丁山に宝剣を与え加勢すると共に、道宗とその従者で

ある張傑の魂を捉え、冥府へ連行する。唐の籠城兵と遠征軍は内外呼応して賊軍を挟撃し、保童は敗走して、仁貴と丁山は凱旋する。丁山は敬徳の娘蘭英を妻に迎え、薛家、尉遲家とも封贈され大団円で終わる。

前項で述べたように、唐に攻め込んでくるのは「遼の蘇保童」であり、讒言により濡れ衣を着せられた薛仁貴が汚名返上の為に軍を率いて蘇保童征伐に赴くのであって、太宗は親征しない。

物語内容を以上のように一旦確認しておき、ついで、この富春堂本『金貂記』における二つの問題点について考えてみたい。

まず一つ目の問題点は、冒頭に附された雑劇『功臣宴敬徳不服老』である。これについては、富春堂本『金貂記』がこの雑劇を改編して薛仁貴の事跡を取り入れ、合体させて成立したものであるという考え方が<sup>6</sup>。以下、便宜上雑劇『不服老』とするが、これについても内容を簡単に述べると、

唐太宗が功臣を祝す宴を開いた折、その功績が大きい順に上座を占めるいうことになった。建国の功臣達はそれぞれ謙遜しあい、譲り合っていたが、皇叔李道宗は、功臣達に構わず自分が首座を占める。それに怒った尉遲敬徳は李道宗を殴りつけ、前歯を二本折る。李道宗はこのことを主宴官の房玄齡に訴え出、玄齡は敬徳を斬首に処しようとするが、徐茂公（徐勳）を始めとする衆将の哀訴により、斬首は取りやめられる。だが代わりに官位を返上させ庶民に落とされることになった。敬徳は悲憤を抱えたまま徐茂公らに見送られ、都から離れる。秦瓊が病に臥し、敬徳が官位を追放されたと知った高麗国は、鉄勒金牙を総大将とする兵十万を前線に送り込む。知らせを聞いた敬徳は発狂したように装うが、詔勅を持ってやってきた徐茂公に見破られ、「老いぼれの役立たず」とけしかけられて憤然として出陣し、鉄勒金牙を討ち取り、辺境に平和をもたらした。

以上、ストーリーの流れはほぼ富春堂本『金貂記』と一致する。尉遲敬徳が李道宗を殴ったということについては、『旧唐書』卷 68 列伝第 18 の尉遲敬徳伝に以下の記述がある。

嘗侍宴慶善宮，時有班在其上者，敬徳怒曰：「汝有何功，合坐我上？」任城王道宗次其下，因解喻之。敬徳勃然，拳毆道宗目，幾至眇。

（〈尉遲敬徳が〉かつて慶善宮での宴に侍った時、上座に座った者がいたので、敬徳は怒り、「お前はどんな功績があつてわしの上座に座るのだ？」と言った。任城王道宗はその下座に座っていたが、敬徳をなだめ説得した。しかし敬徳は激怒し道宗の目を殴りつけ、道宗はほとんどめくらのようになった。）

この場合、李道宗が毆打されたことについて彼自身の責は何もなく、全くとぼっちりなのだが、雑劇『不服老』がこの出来事に発していると考え

<sup>6</sup> 前掲注 4、119 頁並びに前掲注 5『古本戯曲劇目提要』381 頁。

ことは妥当である。

また、富春堂本『金貂記』がわざわざ冒頭にこの雑劇を附していること自体、この伝奇は雑劇『不服老』の構造を借りて編まれたものであると宣言しているわけで、双方には密接な繋がりがあるということは明らかである。

そこで、雑劇『不服老』の尉遲敬徳から富春堂本『金貂記』の薛仁貴へと芝居の主人公が改められた結果変更された点を挙げると、

- ①尉遲敬徳が自分の上座に座った李道宗に怒り殴打  
→薛仁貴が謀反を企てていると讒言した李道宗を尉遲敬徳が殴打
- ②敵国が高麗の鉄勒金牙→遼の蘇保童となった
- ③薛仁貴の息子丁山が登場した
- ④尉遲敬徳に出征の詔勅をもたらすのが徐勣→程咬金となった
- ⑤尉遲敬徳が鉄勒金牙を直接討つ  
→尉遲敬徳は鎖陽城に追い込まれた薛仁貴を救援しに向かい、仁貴の息子丁山と共に賊を追い払う
- ⑥李道宗の魂が女仙翠屏によって冥府に連れて行かれ罰せられる

と、おおよそ6点にまとめられる。

このうち、①と⑥に関しては、富春堂本『金貂記』の問題点の2つ目に關わりがあることなので、まずその2つ目の問題点に言及する。

その問題点とは、富春堂本『金貂記』に欠けている第三折から第九折についてである。ところで、この部分に関しては、総目に各折に対応する題名があり、欠けた折に対応する題名を挙げていくと「国戚郊遊」「綉使凶謀」「翠屏全節」「老媪求屍」「賢公祝寿」「仮吟反句」「愁付金貂」となり、内容のおおよその見当がつく。また、戯曲の選集や伝奇の散齣集を見ると、これら欠けている部分に対応すると思われる内容の戯曲が収録されており、参照が可能である。

例えば『歌林拾翠』<sup>7</sup>二集には「金貂記」と題して「桑園戯婦」、「敬徳打朝」、「山岡牧羊」、「溪辺釣魚」、「婦農耕田」、「尉遲粧風」の六折の散折が収められている。また、『玉谷調簧』<sup>8</sup>にはやはり「金貂記」として「国公牧羊」、「敬徳釣魚」、「桑園戯節」、「敬徳耕田」という散折が残っている。更に『詞林一枝』<sup>9</sup>には「胡敬徳詐粧瘋魔」、『摘錦奇音』<sup>10</sup>には「敬徳罷職耕田」といった散折が収められている。

このうち、『歌林拾翠』の「桑園戯婦」の内容を見てみると、

翠屏という若い未亡人が、その薄幸を嘆きながら、養蚕の為に桑の葉を採取しに行く。そこへ、春の景色を鑑賞すべくそぞろ歩いていた男達

<sup>7</sup> 王秋桂主編「善本戯曲叢刊」第2輯8（台湾学生書局、1984年）所収。明無名氏編、奎壁齋、金陵宝聖樓、鄭元美等書林覆刻本。目録には「歲在己亥」とあり、これが確かならば順治六（1659）年の刊本ということになる。

<sup>8</sup> 前掲6第1輯2 吉州景居士編、明万曆三十八年書林劉次泉刻本

<sup>9</sup> 前掲6第1輯4 黃文華選輯、明萬曆間福建書林葉志元刻刊本

<sup>10</sup> 前掲6第1輯3 龔正我編、明萬曆三十九年敦睦堂張三懷刻刊本

が通りかかり、翠屏の美貌を目にして声をかける。彼らこそ李道宗とその従者の西台御史であった。李道宗は、貞操を盾に自分の誘いを拒む翠屏を口八丁の盧媽媽という者に説得させて王府に連れ帰る。道宗はあれやこれやと翠屏に迫るが、翠屏は拒み続け、ついに頭を階に打ち付けて自死する。道宗は周囲に命じて翠屏の死体を郊外に埋めさせる。

とある。もう一つ、『玉谷調簧』の「桑園戯節」では、桑畑にやってきた未亡人の翠屏を李道宗が見初め、強引に迫るのは同じであるが、拒む翠屏に西台御史が濡れ衣を着せ犯罪者として連れ帰る点、翠屏が自死する場面が描かれないという点が異なっている。また、曲牌や科白の内容も同一ではないので、「金貂記」と題する芝居には複数のバージョンがあり、『歌林拾翠』収録の「桑園戯婦」と『玉谷調簧』の「桑園戯節」とはそれぞれ異なったバージョンの「金貂記」劇本から採集してきたものだという可能性が考えられる。

『歌林拾翠』や『玉谷調簧』に見える李道宗と翠屏の物語は、富春堂本『金貂記』の第三折「国威郊遊」から第五折「翠屏全節」に相当すると思われる。第三十五折で登場した女仙翠屏は、

「昔是人間女、今為天上仙。小聖乃翠屏女是也。生前因被李道宗強迫為婚、守節自尽。」

（昔は人の世の女、今は天上の神仙。わらわは翠屏なり。生前、李道宗によって結婚を迫られ、貞操を守って自ら死にました。）

と「桑園戯婦」の情節と同じ内容を語っており、富春堂本『金貂記』にも翠屏が李道宗に迫られ死んで貞節を守ったという内容があること、第五折「翠屏全節」が、翠屏が自死する場面であることを示唆している。

また、『歌林拾翠』の「敬徳打朝」の内容は、

尉遲敬徳が早朝李道宗を訪れ、彼を奸賊と罵る。その理由は、八十歳の老婆が、自分の亡き息子の嫁の翠屏が李道宗に迫られ貞節を守り抜いて死んだと知り、その恨みを上申された薛仁貴が道宗を糾弾し、それを逆恨みした道宗が太宗に仁貴が謀反を計画していると讒言したからである。敬徳は仁貴の功績を切々と訴えるが、李道宗は相手にしない。それどころか敬徳をいたぶったので、怒った敬徳はついに道宗を殴りつける。

となっており、その後、李道宗が太宗に上奏し、敬徳が一時斬首を言い渡されたが、徐勣のとりなしで一命をとりとめ、官位を剥奪され庶民に落とされるということになるのは、富春堂本『金貂記』と同じである。そうすると、翠屏の姑が死んだ嫁の遺体を求め薛仁貴に李道宗の非道を訴え出たという情節が第六折「老嫗求屍」に、薛仁貴から非道を糾弾された李道宗がそれを恨んで薛仁貴に謀反の意思があると讒言したという情節が第八折「仮吟反句」に相当することになるだろう。富春堂本『金貂記』第十四折では、尉遲敬徳に問い詰められた李道宗が、

「那薛仁貴，妄作反詩，意在謀篡焉。」

(あの薛仁貴めは、みだりに反逆の詩を作って、謀反篡奪の意志を示したのだ。)

と語る科白があり、「仮吟反句」の内容を裏付けている。

以上、欠けた第三折から第九折までは、皇叔李道宗の非道と、陥れられる薛仁貴のことが描かれていたということがわかり、①と⑥の変更点についての細かい事情も確認できた。

さて、芝居の主人公が薛仁貴に改められた結果変更された点①から⑥のうち、本稿が着目したいのは②である。即ち、尉遲敬徳が主人公であった時点では、敬徳・秦瓊という代表的な武将が現役を退いた隙について唐に攻め込んで来る敵として設定されたのは「高麗」であり総大将「鉄勒金牙」であった。これが、芝居の主人公が薛仁貴に改められると、芝居上の敵もまた「遼」へ、そして大元帥「蘇保童」へと設定変更された。

元々、薛仁貴物語における「敵国」は「高麗」であった。これは、薛仁貴が太宗の高句麗（高麗）征伐において功績を挙げ、出世したという歴史的事実から発する。その後、雑劇、平話、説唱詞話、伝奇とジャンルが変わっても、薛仁貴が高麗征伐を経て出世するという物語の枠組みは変わらなかった。

とはいえ雑劇『不服老』の構成を借りて新しい薛仁貴の芝居が編まれることになった際、敵が雑劇のままの「高麗」であるのは不都合なことであった。何故ならば、薛仁貴は、李道宗によって「貶められなければならない存在」であり、尉遲敬徳にとっても「義憤を感じさせ、その名誉の為に前後も顧みず李道宗を殴打するという行動に出ざるを得ない」存在である必要があったからである。出世前の、名も無き一兵卒の薛仁貴ではそうはいかない。既に功成り名遂げた存在となり、李道宗を糾弾し、尉遲敬徳と深く関わるができる立場であって初めて、それが可能だった。そして、薛仁貴の「功成り名遂げる」きっかけこそ、他ならぬ高麗征伐であった。つまり、富春堂本『金貂記』においては、既に高麗は征伐された後でなければならなかったのである。そこで、新たに「遼」が芝居上の敵国として設定されたのであった。

蘇保童は富春堂本『金貂記』第十六折で語る。

「自家非別乃蘇保童是也。……自家向年在本国高麗。俺叔父蓋蘇文与大唐争取世界，俺叔父被薛仁貴戦死。俺流入海西，遼邦天子拜俺為大元帥之職。」

(それがしこそは他でもない蘇保童である。……それがし、かつては本国高麗にあった際、我が叔父蓋蘇文と大唐が天下を争い、我が叔父は薛仁貴によって戦死した。それがしは海西に渡ったが、遼の天子がそれがしを大元帥の職に付けてくださったのだ。)

蘇保童が語る言葉は、富春堂本『金貂記』の物語世界では高麗と遼とはほぼ同一時間軸上に別個に存在した国であり、高麗征伐も既に行われていたという設定を明らかにしている。

こうして、本来雑劇『不服老』にあった「高麗」の「鉄勒金牙」の侵攻と

いう設定は、薛仁貴が芝居の新たな主人公として据えられたことによって「遼」の「蘇保童」の侵攻という設定に書き換えられた。

ところで、富春堂本『金貂記』の中で「遼」という位置づけになっているのは、歴史上 1124 年に金によって滅ぼされた実在する「遼」の王族が建てた「西遼」のことではないのだろうか。確かに、薛仁貴が高麗を征伐する物語を伝える平話、並びに説唱詞話は、それぞれ『薛仁貴平遼事略』や『薛仁貴跨海征遼』と題されており、海を渡った痕跡を残している。だから張清発著『明清家将小説研究』のように、この「遼」は「遼東」のことであるとする意見も出てくる<sup>11</sup>。富春堂本『金貂記』の中でも薛仁貴は「遼東」を平らげた功績から「平遼王」と称されている。芝居上、敵将蘇保童は薛仁貴によって征伐された「高麗」から「海西」に渡り「遼」で大元帥となっている。よって「高麗」＝「遼東の王朝」と読み替えると、歴史上「遼東」を領有していた王朝である「遼」から亡命して「西遼」を建てた旧遼王族の行動にスライドできる。また、「西遼」の地理的な位置を考えれば薛仁貴が「征西大元帥」に任命されたこともつじつまが合う。「征西」と言うからには、征伐対象は中国の王朝から見て「西」になければならないからである。

主人公が尉遲敬徳から薛仁貴へ、敵国が「高麗」から「遼（西遼）」へ、敵将が「鉄勒金牙」から「蘇保童」へ、そして薛仁貴が向かう方角が「東」から「西」へ、こうした変化が、雑劇から伝奇へと改編された際に起こっている。以上のことを踏まえて、次に清朝宮廷の劇本「金貂記」を見ていきたい。

## 二. 昇平署における「金貂記」劇本について

清朝後半にあつて、宮廷の演劇を管理していた部署を昇平署といい、道光七（1827）年に合併されるまで「南府」「景山」というふたつの組織として運営されていた。その昇平署で管理されていた「金貂記」と題する劇本は以下の三種である。便宜上、アルファベットによるナンバリングを行う。

- A：「金貂記」末段八齣（『中国国家図書館蔵清宮昇平署档案集成』第 58 冊所収） \*表紙に「旧外二学」印
- B：「金貂記」二段八齣（『故宮珍本叢刊』第 669 冊所収） \*表紙に「旧外二学」印
- C：「金貂記征東」八齣（『綏中吳氏蔵抄本稿本戯曲叢刊』30 卷所収） \*表紙に「旧外二学」印

また、タイトルからは「金貂記」の劇本かどうか判別がつかなかったが、内容を検証すると富春堂『金貂記』の内容と類似するもの、或いは C と連続関係が認められると思しきものが

- 「唐伝」（『中国国家図書館蔵清宮昇平署档案集成』第 66 冊所収）
- D-a・国戚郊遊等八齣
- D-b・建王言婚等八齣

<sup>11</sup> 台湾学生書局（2010 年）167-168 頁



## D-c・大擺五行等八齣 \*表紙に「旧外二学」印

とあった。

以上六種の劇本のうち、表紙に「旧外二学」印が押してあるものは、昇平署が設立される以前に「南府」の班の一つ、「外二学」に専属していたことを示している<sup>12</sup>。後に述べるように印の無い劇本についても印のある劇本との連続性が見られ、「外二学」の所属であったと考えてもよいと思われる。つまり、現在見られる昇平署管理の「金貂記」劇本は全て「外二学」の専属下にあったと言える。

それぞれの劇本の情節を細かく見ていくと、D-aは富春堂本『金貂記』における第三折「国戚郊遊」から第十四折「陳奏開朝」の内容を再構成したものだと思われる。富春堂本にわずかに残る第三折の最初の曲牌と、D-aの最初の曲牌は共に「伝言玉女」であり、曲詞も全く同じだからである。また、D-aの第二齣「桑林遭婦」の曲牌は、『歌林拾翠』「桑園戯婦」の曲牌とほぼ同じであり、曲詞や情節も『歌林拾翠』と似通っていた。このD-aは「金貂記」劇本の中でも情節的に最初に置いてもいいだろう。そのあらすじを以下に紹介する。

**D-a** : 李道宗が未亡人翠屏を見初め、無理矢理に迫って翠屏を自死に追い込む。翠屏の姑は薛仁貴に訴え出、薛仁貴と共に道宗をなじる。李道宗は薛仁貴への怨みを晴らすべく、西御史の張傑に策を問う。張傑は、薛仁貴が篡奪を目論む詩を作り、世に広めていると太宗に奏上すればいいとそそのかす。道宗の奏上により薛仁貴が捕縛される。仁貴の妻柳氏は息子丁山に尉遲敬徳に知らせに行かせる。敬徳は丁山に必ず父親を救うと約束する。囚われた薛仁貴は、張傑によって鞭打ち40回の拷問を受ける。翌日、李道宗と朝廷の門前で言い争った尉遲敬徳は、道宗から仁貴と共に謀しているのだろうと言われカッとなって道宗を殴りつける。敬徳はさらし首の刑を申し渡されるが、徐勣の懇願で官職を免じられ追放されることになる。

D-a以外の劇本は、富春堂本と比べるとやや独自の展開を見せるようになる。ここで、「李道宗を殴りつけた尉遲敬徳が、官職を免じられ追放されることになった」後、「田舎へと旅立つ尉遲敬徳を友人達が見送る」という、富春堂における第十五折「餞私行路」の内容を持つBを、情節的にはD-aの直後にあたる劇本だと仮定し、あらすじを紹介する。

**B** : 高麗の朝鮮都統征唐元帥鉄勒金牙は、薛仁貴と尉遲敬徳とが陥れられたのを知り、唐に攻め込むことにする。尉遲敬徳は薛丁山や同僚に見送られ、都を去る。鉄勒金牙率いる10万の高麗軍が侵入してきたとの報告を

<sup>12</sup> 「景山」にも「外二学」という班はあったが、嘉慶帝の頃に外学は三班あったところが縮小され「大班」「小班」と呼称されるようになった。合併するまで「外二学」が存在したのは「南府」であることから、「旧外二学」印が押されている劇本は「南府」の「外二学」に専属していたと考えられる。

受け、徐勳は薛仁貴を釈放し高麗軍に当たらせるべしと説く。薛仁貴は程咬金と共に出立する。途中、仁貴は隠居する尉遲敬徳を訪ねる。鉄勒金牙は、唐軍が進軍してきたことを知ると、截賢城に空城の計を仕掛ける。まんまと罠に陥った唐軍であったが、出陣前に徐勳が持たせた手紙に「救援の軍が来るまで持ちこたえるように」とあった。先鋒として別行動をとっていた為に罠から逃れえた程咬金は、都へ救援の兵を請いに戻ることにする。

ところで、この劇本 B には、欠画、欠筆のない「玄」の文字が存在する。第一齣「金牙演法」冒頭の「【端正好】法森巖玄機粵令、……」やその次の曲牌「【前腔】効當年玄門教向、……」という部分である。これは、この劇本が康熙帝の諱「玄燁」に対する忌避が必要ない時期に抄写されたものであろうことを意味する。後に述べる劇本 A においても「玄」字の避諱が見えず、劇本 A と劇本 B は抄写された時期が近いものだと考えられる。また、劇本 B には薛仁貴率いる唐軍が敵将鉄勒金牙の空城の計にはまり「截賢関（城）」に閉じ込められ、先鋒として別働隊を率いていた程咬金が都に救援を求めに帰るという場面があるが、六種の劇本のうち、他の劇本上で「截賢城」に言及されるのは、劇本 A で薛仁貴が「我々は截賢城を破り黒峰口を突破して～」と語る部分のみである。ということは、劇本 A、B は同一劇本の異なる段であるという可能性が出てくる。

B の直後にあたる劇本は存在せず、失われた可能性が高いが、情節の流れで言うと C が B の後に位置するものであることは推定できる。B と C との間で失われた劇本は、C の内容から「李道宗に陥れられた薛仁貴が、家族に累が及ぶことを恐れ、母親を守って故郷に戻り、時が来るまで姓名を隠して生活するよう薛丁山に命じていたが、程咬金が援軍を求めに行った際、道に迷って隠れ住んでいた薛丁山達の住処に至り、薛丁山が父親との約束を破って出陣してきたこと」「金鎗仙が薛丁山に馬や鎧を授けたこと」「薛丁山と樊梨花との出会い」というような情節を持っていたことが伺える。

C: 薛仁貴は、自分との約束を破り、出陣してきた息子丁山を斬ろうとしていた。程咬金、その息子程螭虎、樊梨花、尉遲敬徳らが「丁山は母の命で父親を助けに来たのだ」とその怒りを必死で宥める。太宗の詔勅が降り、全員を官職に封じるということで、その場は収まりがついた。高麗の華英郡主は、幼い頃に碧霞元君に攫われ、仙術や武術の修行をしていたが、唐の程螭虎との姻縁を告げられ高麗に戻った。程螭虎は作戦遂行中に高麗増建王と出くわし、彼を捕らえようとするも逆に華英郡主に捕まってしまう。碧霞元君は老人に変身して程螭虎の前に姿を現し、華英郡主との姻縁と、公主が唐に帰順するという予言とを聞かせ、程螭虎はわざと高麗に降伏する。唐軍は、鳳凰城を陥落させる為の作戦を実行していたが、息子が高麗に降ったと知った程咬金が様子を探りに敵陣までやってきて、華英郡主の法術の威力を知る。作戦が功を奏し、鳳凰城は落ちて、鉄勒金牙は敗走する。

さて、Cで唐軍は鳳凰城を落とし鉄勒金牙を敗走させるが、劇本Aにもやはり唐軍が鳳凰城を攻め落とすという下りがある。しかし、劇本Aの登場人物や唐軍が戦う過程は、CやDとは明らかに異なっている。まずはAの情節を紹介し、続いてD-b、cの情節を述べる。

A：薛仁貴、薛丁山、樊梨花、程咬金、尉遲敬徳らは截賢城、黒峰口を破って進軍し、鳳凰城に至る。高麗国王は姣鸞公主を派遣して鳳凰城を守らせていた。薛仁貴が練った計略は見事にあたり、姣鸞公主は敗走し、鳳凰城は唐軍のものとなる。更に唐軍は鉄勒金牙が守る天山にも進軍し、攻略する。敗走した金牙は公主と合流し、援軍を求めて思郷城へ戻る。援軍を得た姣鸞公主は鶴峯界口の清流川に先天五行八卦陣を敷く。しかしこの陣は、樊梨花が聖母から授けられた太極圏によって破られる。さらに公主の使う飛刀も丁山の放つ神箭によって尽く落とされる。高麗増建王は要所を次々と唐軍に落とされたことを知り、また、戻ってきた公主や金牙から敗戦の様子を聞き取り乱す。唐軍が思郷城を取り囲み、口々に「猷城しろ」と叫んでいることを報告された王に、宰相達は降伏を勧める。もう一戦と食い下がる金牙を制止し、王は自ら降伏状を携えて唐軍の陣営へ赴く。降伏を受け入れた薛仁貴は、増建王を改めて朝鮮国王に封じるとの太宗の命を伝える。宴を開くから滞留してくれと頼む王の言葉を断り、唐軍はすぐに長安へ戻る。

D-b：華英郡主と程螭虎との婚礼の準備が進む中、増建王は鳳凰城が落ち、鉄勒金牙が救援を求めてきたことを知る。華英郡主と共に出陣した程螭虎は、秦懷玉と打ち合わせた上で彼を捉える。捉えられた懷玉は、螭虎の手紙と華英の宝を持って敵陣から逃げ出す。薛仁貴が華英の飛刀の攻撃を受け重体に陥る。丁山は、師匠である金鎗仙から授けられた壺中神箭で華英の飛刀を射落とす。飛刀を破られた華英は、陣に戻って五方奇陣を敷くことにする。

D-c：華英が敷いた陣を、樊梨花が破る。程螭虎は、唐の降伏兵である李智能と図り、唐軍が天山を取りやすくなるよう準備する。天山が唐軍の手に落ち、その手引きをしたと華英が螭虎を詰っていると、碧霞元君が現れ、華英には父親への降伏勧告を、螭虎には薛仁貴へ高麗の降伏を待つよう伝言させる。増建王は唐兵が思郷城を取り囲んでいることを知り、華英の勧めもあって降伏状をしたため、直接唐軍へ赴く。増建王自らの降伏を受け入れた薛仁貴は、王を改めて朝鮮国王に封じるとの太宗の命を伝える。そして唐軍はすぐに長安へ帰還する。

以上のようにA並びにD-b、D-cは、内容が重複していることがわかる。

本文を見ると、C、D-b、D-cは高麗王の娘が「華英郡主」であり、その姻縁の相手として「程螭虎」がおり、二人を結びつけ高麗を唐に帰順させる役割として「碧霞元君」が登場するという要素が共通している。よってC、D-b、D-cの三劇本は密接につながっていると言え、同一テキストの可能性はある。

一方劇本Aでは、高麗王の娘が「姣鸞公主」であり、「程螭虎」も「碧霞元

君」も登場しない。そういった点では C、D-b、D-c とは関係が薄いように思われるが、共通する曲牌や曲詞が少なからずある。このうち、避諱に関わる箇所を挙げる。曲詞内の網掛けは筆者が施したものである。

劇本 A 第四齣「怒擺五行」

【點絳脣】八卦生爻，五行顛倒，陰陽妙，變幻週遭，誰識玄機妙。

【哪吒令】正東上震交，青蒼旂色繞。須奮勇欄着，要把那敵操。換玄武休錯，擒賊寇非小。定雄威共逞驍，方顯得機玄妙。望諸方向各守堅牢。

劇本 D-c 第一齣「大擺五行」

【點絳脣】八卦生爻，五行顛倒，陰陽妙，變幻週遭，誰識元機妙

【哪吒令】正東上震交，青蒼旂色繞。須奮勇欄着，要把那敵操。換元武休錯，擒賊寇非小。定雄威共逞驍，方顯得機元妙。望諸方向各守堅牢。

網掛け部分を見てわかるように、劇本 A では「玄」とあり、欠画や欠筆もされていないが、劇本 D-c では「元」となっている。即ち劇本 A は康熙帝の諱「玄燁」に対する忌避が必要ない時期に抄写され、劇本 D-c は忌避が必要となった後に抄写されたものだと言い得、劇本 A は劇本 D-c に先行するという関係が認められるのである。では、劇本 D-c と密接な関係があると認められる劇本 C 並びに D-b と、劇本 A との関係はどうであろうか。以下に劇本 A 及び劇本 C、D-b、D-c の各齣の内容を対照させた表を示す。

表 1 物語から推定される劇本 A 並びに C、D-b、D-c の類似関係

劇本 A	劇本 C、D-b、D-c
	C 第一～第六齣
A 第一齣：仁貴設計	C 第七齣：奉令埋伏
A 第二齣：咬金誘敵	C 第八齣：智取鳳城
A 第三齣：失陷天山	
	D-b 第一～第七齣
A 第四齣：怒擺五行	D-c 第一齣：大擺五行
A 第五齣：施宝破陣	D-c 第二齣：梨花破陣
A 第六齣：箭射飛刀	D-b 第八齣：箭射飛刀
	D-c 第三～第六齣
A 第七齣：建王議降	D-c 第七齣：番王窮計
A 第八齣：獻表班師	D-c 第八齣：受表班師

\*齣名があり、太枠で囲まれた網掛けの部分が劇本 A とその他の劇本が類似している齣である。

斜線はその齣に類似する齣が存在しないということを意味する。

先行すると思われる劇本 A を主としてその他の劇本の齣の順序を対照させると、表に見えるように劇本 A の内容が劇本 C、D-b、D-c に広く跨り、また劇本 C 第一から第六齣、劇本 D-b の第一から第七齣、劇本 D-c の第三から第六齣の内容は劇本 A には見られない。更に、劇本 A の「箭射飛刀」と劇本 D-b の「箭射飛刀」とは齣が現れる順序が異なっている。この点について、劇本 A 第四から六齣と、それに対照する劇本 D の齣との曲牌と韻目とを比較して検討する。

表 2 劇本 A と劇本 D における類似する齣の曲牌と韻目

劇本 A			劇本 D		
齣名	曲牌	韻目	齣名	曲牌	韻目
第四齣 怒罷五行	粉蝶児	蕭豪韻	D-c 第一齣 大罷五行	劇本 A 第四齣と 同一	劇本 A 第四齣と 同一
	點降唇				
	油葫蘆				
	哪吒令				
	鵲踏枝				
	寄生草				
第五齣 施宝破陣	醉花陰	齊微韻	D-c 第二齣 梨花破陣	劇本 A 第五齣と 同一	劇本 A 第五齣と 同一
	畫眉序				
	喜遷鶯				
	畫眉序				
	出隊子				
	滴溜子				
	刮地風				
	鮑老催				
	四門子				
第六齣 箭射飛刀	雙声子	真文韻	劇本 A 第六齣と 同一	劇本 A 第六齣と 同一	
	水仙子	齊微韻			
	尾声				
			D-b 第八齣 箭射飛刀	風入松	江陽韻
				〃	
				急三鎗	
				把人傷	
				風入松	
			尾声？		

\* 「？」のマークはテキストに欠損や汚れがあり不明になっている部分

表からわかるように、劇本 A の第四から第六齣の曲牌と韻目は、劇本 D-c の第一から第二齣と全く同一である。劇本 A 第六齣「箭射飛刀」と、劇本 D-c の第二齣「梨花破陣」とは内容が全く異なるのに、曲牌が同じになるということはあるだろうか。

実は、「雙声子」「水仙子」の曲詞は、「唐兵が一斉に攻め寄せて来て高麗軍が慌てる」、「奮闘して活路を見出す」、「敗戦に慄き悔しがる」と、戦場を描く場面であればいくらでも使い回しの効くものであった。よって、「箭射飛刀」であろうと「梨花破陣」であろうと、戦闘場面であれば「雙声子」「水仙子」が用いられるのに何ら問題はないのである。

また、劇本 A 第六齣の「尾声」、劇本 D-c の「慶餘」の曲詞は共に「笑伊枉設牢籠計，似捲殘雲敗葉飄飛。只看掃蕩氛侵指，日里定辺陞安社稷。」と、高麗王女が敷いた五行八卦陣を梨花が破ったことを唱っている。そうすると、劇本 A において、時間的には「施宝破陣」の後にくる「箭射飛刀」の最後にこの韻文が入るのはおかしい。逆に、劇本 D-c 第二齣は破陣の物語なのだから、最後が「笑伊枉設牢籠計～」と締めくくられるのは理にかなっている。しかしそうなると、第二齣に韻目の異なる「雙声子」が混在していることが問題になってくる。

この問題は、元々、「酔花陰」から「尾声」までの曲牌で構成された「施宝破陣」の齣を分断し、新しく「箭射飛刀」の場面を挿入して別の齣として独立させたことから起こったのではないだろうか。「水仙子」「尾声」が共に「施宝破陣」の他の曲牌の韻目と同じ齊微韻で、先述したように「尾声」が破陣のことを歌っているのだから、「水仙子」も「尾声」も元は同じ「施宝破陣」を演じる齣のものであったと考えられる。また、「水仙子」と「尾声」とを新しく作った齣の曲牌にしたものの、曲牌が「水仙子」の他は「尾声」のみというのも体裁が悪いので、他の段から流用してきたものが「雙声子」であったのかもしれない。内容から見ると、劇本 A では薛丁山が神箭で高麗王女の飛刀と戦うという肝心の場面は白のみで構成されていて、いかにも曲牌をつぎはぎした中に白を挿入したと見える形になっている。

劇本 D-c 第二齣は、曲牌の並び上は、「施宝破陣」の曲牌に「雙声子」が入り込んだ後の抄写ととらえることができる。しかし齣は途中で分断されることなく、最後の曲牌の「慶餘」まで続いている。この状況は、「施宝破陣」と「箭射飛刀」との二つの齣に別れた状態のものから薛丁山と高麗王女との戦いの場面の白を取り去り、一つの齣に編成し直した時、改編された曲牌をそのまま組み入れたので、「雙声子」も混在した状態で残った結果だと考えられないだろうか。となると、劇本 D-c は劇本 A を改編したもののようにも思われるが、現在見られる資料からは双方に直接的な改編関係があったと断定できる証拠は見つからない。「施宝破陣」齣の分断自体も、劇本 A 抄写以前の、劇本 A の原型とも言うべき劇本の内部で起こって、一方で劇本 A に受け継がれまた一方で劇本 D-c に至るまでに再度一つに編成されたという可能性もある。

さて、では仮に、前述のように「施宝破陣」が一度二齣に分断され、再び一つの齣となったとして、取り去られた白はどこへ行ったのだろうか。劇本

D-b 第八齣がその答えの一つであろう。薛丁山と敵王女との戦いの場面の白は、劇本 A 第六齣の当該部分の白と非常によく似ている。劇本 D-b の内容は、高麗の華英郡主と程螭虎との姻縁語りと、華英の仙術による戦いを主題としている。「唐將軍と敵国王女との姻縁」は劇本 A では全く言及されなかった要素なので、劇本 A の後、劇本 D が成立する間に新增されたものだと考えられる。敵の実質的総大将である華英の使う飛刀の術が、物語の主人公格である薛丁山に破られるという情節は、華英の物語のクライマックスに相応しい。それゆえに、華英の物語が新增された際、白だけで説明されていた薛丁山との戦いの場面に曲牌と曲詞が加わり、齣として形が整って、華英の物語の最後に据えられることになったのではないだろうか。それが、劇本 A と劇本 D において「箭射飛刀」が異なった順序で現れる理由のように思われる。

以上のように、避諱の状況の相違や齣の改編について検討すると、劇本 D は劇本 A 抄写以降、劇本 A かあるいはそれに近い関係の劇本を参照し改編、新增されて成立したという可能性を見出し得た。では、他の劇本はどうだろうか。

劇本 B に関しては、先述した通り、劇本 A と同じく康熙帝の諱に対する忌避が見られないこと、「截賢関（城）」といった共通する地名をテキスト上に持つことから、劇本 A と非常に近い時期に抄写された、あるいは同一テキストの別の段である可能性がある。

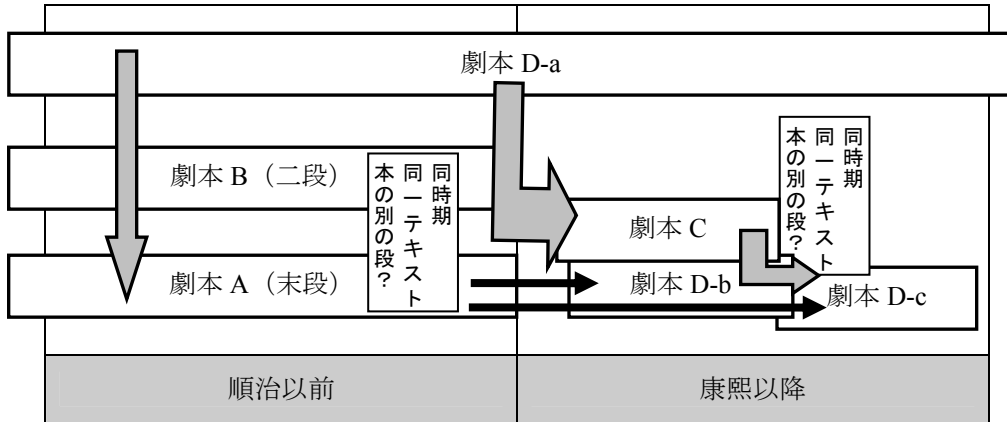
劇本 C もまた、先述したように、登場する人物名や唐将、高麗王女との姻縁物語など共通する要素が多い劇本 D-b、D-c と同一テキストとも思しき強い関連性が伺われる。

劇本 D-a は、避諱も見られず、その他の劇本と特別に共通するような要素も見当たらないので、抄写時期や他の劇本との関係もわからない。ただ、劇本 D-a の情節は、劇本 B の情節との間に「尉遲敬徳の都落ち」→「群英達の餞別」とスムーズに接続する。そのため、もしかしたら劇本 D-a と劇本 B とは同一テキストの頭段と二段<sup>13</sup>に当たるかもしれないが、確定できる証拠はない。

以上のことを次頁にて図式で表してみる。

<sup>13</sup> 劇本 B の表紙には「金貂記 二段」とある。

図1 六劇本の抄写時期並びに情節の流れと改編の状況



\*  $\Rightarrow$  は情節の流れ,  $\rightarrow$  は齣の構成に変化があった関係,  $\square$  は劇本抄写時期の範囲。

六種の劇本は、欠けている部分はもちろんあるが、情節上は「金貂記」物語の一通りの流れを形成することができる。劇本 D-b、c は康熙年間以降に抄写された同一テキスト本の可能性があり、劇本 A かそれに先行する劇本の内容を改編して成立したものだと考えられる。劇本 A と劇本 B は順治期に抄写され、同一テキスト本の可能性がある。劇本 D-a については抄写時期や他の劇本との関連について確かなことはわからないが、「金貂記」物語の冒頭にあたる幕であることは確かである。

以上、現存する昇平署管理の「金貂記」劇本六種について、劇本の関係性、先後関係、抄写時期、改編とその時期について確認した。次に、昇平署「金貂記」劇本と富春堂本『金貂記』との比較から、「金貂記」劇本の内容上の改編について考えることとする。

### 三. 富春堂本『金貂記』と昇平署「金貂記」の違い ——内容の改編を中心に——

昇平署「金貂記」物語上で薛仁貴・丁山親子が戦うのは、「高麗」であり「鉄勒金牙」であった。ところで、第一項において述べたように、富春堂本『金貂記』物語上で薛仁貴・丁山親子が戦うのは「遼」であり「蘇保童」である。「高麗」も「鉄勒金牙」も、富春堂本『金貂記』の前身、雑劇『不服老』上で尉遲敬徳が討伐する相手である。

薛仁貴の敵が「遼」から「高麗」へと変わったことについて、積極的な意図があったと思しき痕跡が劇本 B 第四齣「徐勣保奏」に見える。薛仁貴に軍を与え高麗にあたらせようと徐勣が太宗に奏上した時、太宗の白に「……命卿領旨。前往獄中、召取薛仁貴代罪征討、加封征西大元戎之職。……」とある。高麗を征伐するのであれば「征東大元戎之職」に封じられるはずである。実際に薛仁貴の出陣の場面を描いた第五齣の齣名は「代罪征東」であり、薛



仁貴も自ら「征東仁貴薛平遼」と名乗りもしている。にも拘らず「征西大元戎」とあるのは、富春堂『金貂記』における薛仁貴が「征西大元帥」であった<sup>14</sup>ことの名残である。つまり、本来の「征西」の物語を「征東」の物語にしようとした為に却って「征西大元戎」という改めもらしが発生してしまったと言えるのである。

さて、清朝宮廷演劇における「金貂記」の敵が「高麗」に設定された理由として、筆者が冒頭述べた「乾隆帝のジュンガル・回部平定を称揚する意味での改編」と同類の、政治的な意図を持った改編が、昇平署「金貂記」にも行われていた可能性を提示しておきたい。

前項で、昇平署「金貂記」の劇本に、順治期に抄写された可能性のあるものがあることを確認した。順治期までの清朝情勢を鑑みると、1627年から1637年にかけて起こった「丁卯胡乱」「丙子胡乱」という、清（「丁卯胡乱」当時は後金）が李氏朝鮮を制圧し、その冊封体制に組み込むことになった出来事にたどり着く。「金貂記」劇本は、この事柄を受けて従来の「金貂記」戯曲を改編したものではないだろうかと筆者は考えるのである。

その目的は、清太宗ホンタイジの業績の称揚であり、「大清グルン」の誇示であり、冊封体制に入った朝鮮に対する牽制と威圧である。清朝宮廷演劇の観客は、皇帝、後宮の女性たち、そして藩部属国の王たちと外国の使者である。その劇本は、しばしば彼らのために改編された。冒頭で述べた「薛家将」劇に留まらず、清朝宮廷では「薛家将」劇よりはるかに人気があり、上演回数も多かった「西遊記」劇にも政治的意図を持った改編は見られる<sup>15</sup>。

李氏朝鮮は、明王朝に深く敬服し、明の衰微に比例するように勃興してきた後金に対しては反抗的な政策をとり続けていた。こうした朝鮮に対し後金軍が侵攻し、後金を兄、朝鮮を弟とする兄弟国盟約などを始めとする和議を結んだのが、李氏朝鮮のいわゆる「丁卯胡乱」である。その後、ホンタイジが皇帝に即位し、国号を「清」に改め、兄弟国盟約を結んでいた朝鮮に対し臣従を要求すると、朝鮮はこれをはねつけ、臨戦態勢をとった。激怒したホンタイジは軍を率いて朝鮮に侵攻し、最終的に朝鮮国王仁祖を南漢山城に追い詰め、40日余りの籠城戦を経て降伏させた。この時、ホンタイジは仁祖を漢江の三田渡の清軍陣営に徒歩で来させ、三跪九叩頭による臣下の礼を行わせたという。これを、「丙子胡乱」という。

しかし、こうした二度の侵攻を受け、屈辱的な君臣の礼を取らされても、朝鮮は容易に清に従うということをしなかった。仁祖に代わり朝鮮国王に即位した孝宗は、父仁祖が清から受けた屈辱を晴らすべく、清の討伐（北伐）を期して軍備拡充に努めるなどしていた。しかし結局、清からは逆にその軍事力に目をつけられ、南下していたロシア勢力を討伐する為に充てられることになる（羅禪征伐）。

昇平署「金貂記」劇本は、こうした清と朝鮮との関係を背景に改編されたのではないだろうか。臣従させたとはいえ面従腹背の態度をとり続ける李氏朝鮮に、侵攻された時の屈辱を思い起こさせ、「大清グルン」の国威を思い知

<sup>14</sup> 第十七折「李公保薛」で、李勣（徐勣）の奏上を受けた太宗が「即日頒赦，遣李勣賚旨，仍復薛仁貴平遼公之職，加授征西大元帥。」という詔勅を出している。

<sup>15</sup> 前掲注2 論文

らせる為に、「もとは高麗征伐の物語」である「金貂記」劇を取り上げることにし、薛仁貴はそのまま残し、敵役を「高麗」「鉄勒金牙」に戻したのである。

薛仁貴が「高麗」を討つ人物としてそのまま残されたのは、やはり朝鮮と薛仁貴の深い関係の為であろう。薛仁貴に唐太宗の高句麗親征で出世の糸口をつかんだという歴史的事実があることは先に指摘した通りであるが、薛仁貴の一生はほぼ、高句麗の討伐と統治に深く関わるものであった。遼東半島から朝鮮半島の範囲に居住する人々の中で、薛仁貴が恐ろしい「神」として祀られていたという例もある<sup>16</sup>。その「神」が親子共々「高麗」を討伐するという物語は、特に朝鮮の人々には非常な圧迫感を与えたのではないだろうか。そうでなくとも、少なくとも薛仁貴による「高麗」討伐ないし統治のイメージを心に喚起させる効果は期待できよう。それが、昇平署「金貂記」劇が、薛仁貴を主人公に据えたまま敵方を「高麗」「鉄勒金牙」に戻した理由であると考えられる。こうした「金貂記」劇を、「高麗グループ」とくくりにすることにする。

しかし、「金貂記」物語が、清の李氏朝鮮征圧をきっかけとして清朝宮廷内で「高麗グループ」の劇本に改編されたとして、ではなぜ、小説『説唐三伝』では敵国が「哈密国」となり「太宗親征」が行われる物語になっているのだろうか。なお、小説上の敵の将軍の名は「蘇保童（蘇宝同）」であり、「高麗グループ」の劇本から富春堂本『金貂記』の形へと再び戻ってしまっているのである。その事情について、以下の項で考えを述べる。

#### 四. 『金貂記』から『説唐三伝』へ ——清朝の対外政策の変化——

李氏朝鮮は、清の冊封体制に入った後も水面下では崇明の態度をとり続け、孝宗の頃までは報復の刃を研ぎ澄ませていたということは前項に述べた通りである。しかし、羅禪征伐によって蓄えてきた軍備を削られ、1622年に台湾で明復興を目指して戦い続けた鄭成功が死に、その遺族が清に降伏し明復興の道が完全に絶たれてしまうと、清との国力差もあり、「無駄な抵抗をやめる」という方向に態度を転化させていく。1673年に三藩の乱が勃発した際、清に対してチャハルが叛旗を翻し、チベットが政治介入しようとし、青海や安南には王輔臣や呉三桂に与しようとする勢力が現れたが、朝鮮は、清へ一矢報いるまたとない好機だったはずのこの動乱に対し、何ら行動を起こしていない<sup>17</sup>。

<sup>16</sup> 昭和18年発行大東亜学術協会編『学芸』という雑誌に、「満州における薛仁貴の伝説」という記事が新1巻2号並びに3号（1943年8月、9月）の二度に亘り掲載されている。執筆者は村田治郎（京都帝大工学部教授）とある。執筆者は自分が読んだ『東三省古蹟遺聞』という書誌記載の「薛礼廟」について述べている。「薛礼廟」は薛仁貴を神として祀っており、遼東半島の朝鮮側の山の中にあるという。記事の中では「朝鮮紳士の金さん」が「薛公は女や子供達で恐れないものはない程のこわい人ですから、子供が泣くときは母親が子供を叩きながら、泣きやめないと薛礼爺がきて耳をちよん切つてしまふよと、嚇すのです。」と語ったとある。

<sup>17</sup> 神田信夫『清朝史論考』第I部清史雑考編「三藩の乱と朝鮮」（山川出版社、2005年）

また、雍正・乾隆期の清の繁栄は、朝鮮の清に対する「夷狄」認識を変えることにもなった。徐東日氏による『朝鮮朝使臣眼中的中国形象』<sup>18</sup>では、燕行使の記録から伺える順治、康熙、乾隆三代の清朝皇帝の印象が、「暴虐」で「悪魔的」なイメージからやがて「理想的君主」へと転じていることが指摘されている。こうしたイメージの変化は朝鮮国内においてもあったようで、18世紀頃から朝鮮国王が清朝皇帝について「天子」「皇帝」と表現するようになったと言う。その頃から朝鮮支配層が、その就くべき相手として、明朝に代わって清朝を容認するようになったのである。

朝鮮がそのようにして清の冊封体制に収まりつつある一方、清朝を悩ます新しい勢力が西方に勃興していた。康熙・乾隆帝によって平定され、「回疆」と称されるに至った地域である。

清朝に平定されたとは言っても、回疆は完全に治まることはなく、清朝のジュンガル政権征伐によって解放された白山党ホージャ家が黒山党ホージャ家を打倒した後に独立を目指したり、コーカンド・ハン国の保護を得たジハーニングールがカシュガルに侵入したり、その事件の報復措置で清朝から通商関係を絶たれたコーカンド・ハン国がカシュガル一帯の反乱を支援して清朝に侵入させたりと、問題が続いた。更に、陝西省に端を發した回民暴動が回疆にも波及し、各地にイスラム政権が誕生することになる<sup>19</sup>。

清朝の懸念が、朝鮮に比べればはるかに落ち着きのないこの地域に集まることは当然のことと言える。朝鮮の、清への面従腹背が過去のものとなり始めたからには、清朝がわざわざ朝鮮に対する国威を振りかざす演劇を上演する必要などなくなってくるのである。時代はいつしか、いつまでも脅かされ続ける回疆に目を向けることを清朝に要求するようになった。清朝宮廷の「薛家将」劇において、乾隆帝の平定がきっかけとなり改編された「哈密国」「回兵」が敵となり「唐太宗親征」の要素がある「薛家将」劇が、「高麗」を敵とする「金貂記」劇に取って代わるのもそうした時代の要求であった。「哈密グループ」とも呼ぶべきそれらの劇『鎖陽関』、『西唐伝』、『征西異伝』などは、道光年間に上演が集中し、次いで咸豊年間、光緒半ばまで演じられたという記録がある<sup>20</sup>。これはそのまま、コーカンド・ハン国により脅かされていた当時の回疆地域への危機感の表れであろう。こうして「哈密グループ」は、回疆の状況によって清朝宮廷「薛家将」劇の中心に踊り出、さらに小説にも影響を与えたことから「高麗グループ」を凌いで定番化することになった。薛丁山が登場する富春堂本『金貂記』は、「征西」の物語であった。その薛丁山を主役とする『説唐三伝』が西方の敵勢力を迎え討つのは、違和感なく受け入れられたことだろう。

<sup>18</sup> 中華書局、2010年

<sup>19</sup> 一連の記述は、『世界歴史体系・中国史——明～清』（山川出版社、1999年）「8. 清朝の藩部（二）新疆とチベット」に拠った。

<sup>20</sup> 『中国国家図書館蔵清宮昇平署档案集成』（中華書局、2011年）差事档、花名档、承応档などを参照した。

## おわりに

以上、明伝奇『金貂記』の物語について、清朝宮廷で「金貂記」とされる戯曲テキストを取り上げ、清朝宮廷内部における受容と変遷の有り様を検証した。先に検証した「哈密グループ」と同じく、「高麗グループ」と振り分けられる一連の劇本も、清朝の政治的事情により改編されている可能性が提示できる。しかし、東方より西方の危機が大きかった清朝の、やはり政治的事情に絡んで、結局「高麗グループ」は清朝宮廷内において「薛家将」劇の主流たり得ず、その座を「哈密グループ」に明け渡すこととなったのである。

### 清宮廷戏剧上“薛丁山”故事的接受 ——通过金貂记故事的变貌——

柴崎公美子

清代，升平署掌管宮廷戏曲演出活動，所謂的“薛家將”戏曲就是其中之一。明代有一篇名為“金貂記”的關於薛仁貴和薛丁山的傳奇。升平署也有叫金貂記的戏曲，現在能看的戲本就一共有六種。這些戲本都有些相同的特点，就是①沒有太宗親征②敵國是高麗③敵將是鐵勒金牙，故稱為“高麗群”。

“高麗群”中的一篇戲本上因為沒有忌避“玄”的字，所以就有順治時代以後完成的可能性。升平署有時候為了向國內外稱贊彰顯皇帝的偉績，會在歷來的戲本中投影當時皇帝的成果進行改編。故“高麗群”的戲本都可能是添加了皇太極鎮壓朝鮮的功績後改編的。

升平署也有其它關於“薛家將”的戲本，那有些戲本有①太宗親征的內容②敵國是哈密③敵是蘇元帥和回兵等的特点，故稱為“哈密群”。這種戲本都可能被施加的由於乾隆帝平定准噶爾、回疆的功績改編。

雖然乾隆帝平定了准噶爾、回疆，但是西方形勢還有很多問題，在回疆常常爆發叛亂。清朝廷認為對回疆誇示清朝的國威比對朝鮮重要，並且認為哈密群的戏曲比高麗群的重要。所以從升平署表演的薛家將戏曲的種類來看，哈密群便成了薛家將戏曲的主流。

**关键词：**《金貂記》，《說唐三傳》，薛丁山